

稲作情報

秋田地域振興局 農林部 農業振興普及課

No.6

TEL:018-860-3410
FAX:018-860-3834

草丈は長く、茎数は多い。生育ステージの確認を！

葉いもち病・斑点米カメムシ類ともに発生多い、畦畔・農道等の草刈りを徹底！

1 気象経過と生育状況

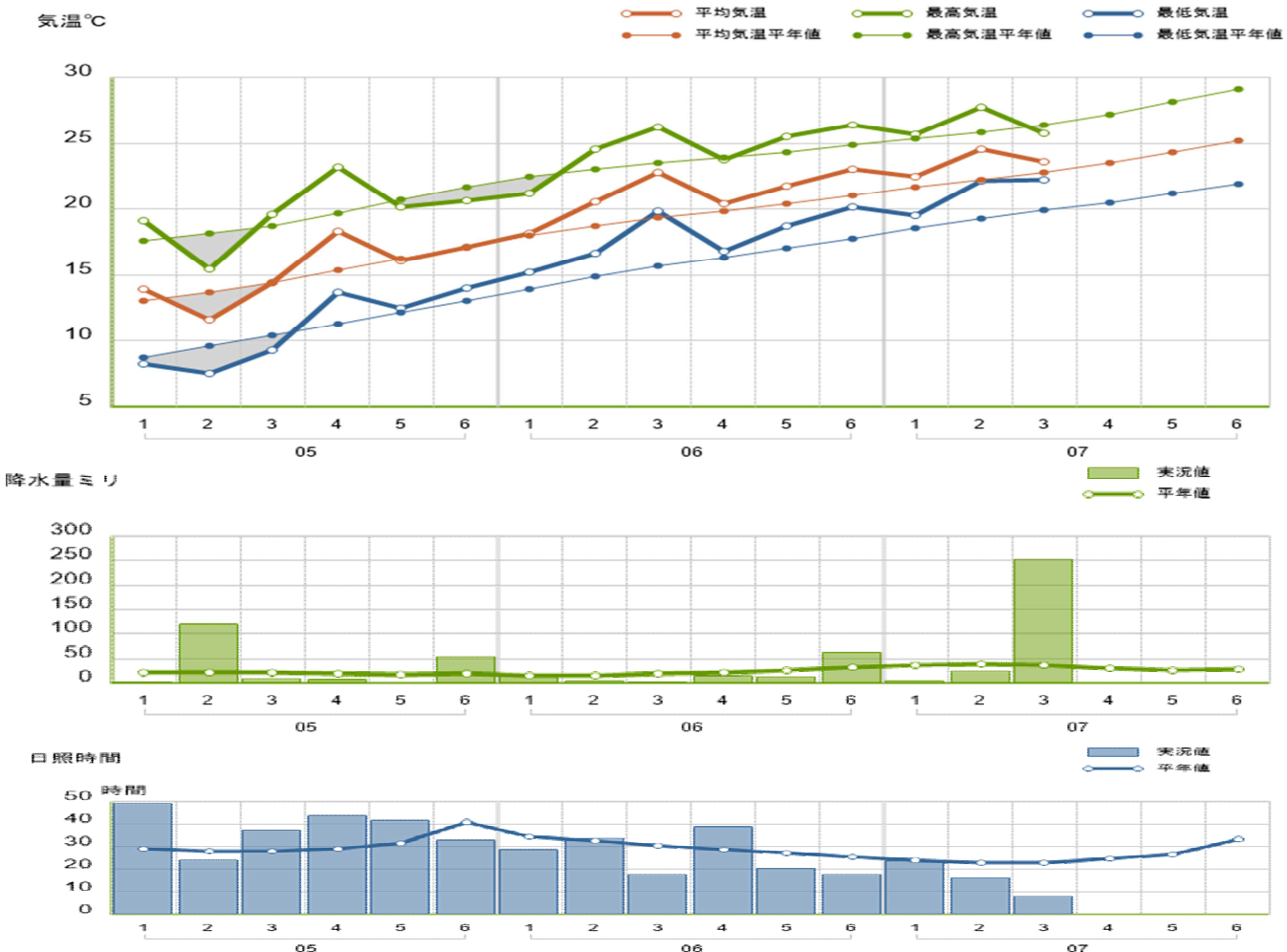


図 半月毎の気象経過(4月1日～7月15日)(アメダス秋田、気象庁 HP より作成)

〈概況〉

7月上旬の気温は高く、降水量は少なく、日照時間は平年並に推移しました。

7月14日の定点調査結果(あきたこまち)は、平年に比べ草丈は71.8cm(平年比108%)と長く、茎数は494本/m²(同比102%)とやや多く、葉数は11.5葉(同差+0.1葉)と平年並、葉色は42.2(同比102%)とやや濃い結果になりました。

調査ほ場のほとんどで、すでに幼穂形成期を過ぎていることから、生育ステージ(幼穂長や出葉状況)に合わせた栽培管理を徹底してください。

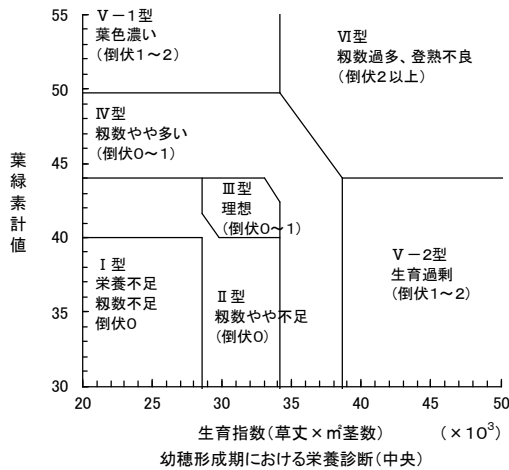
表 水稲定点調査結果(7月14日実施)

	本年	比較	
		平年比・差	前年比・差
草丈	71.8cm	108%	96%
茎数	494本/m ²	102%	121%
葉数	11.5葉	+0.1葉	-0.4葉
葉色 (SPAD)	42.2	102%	99%

※管内定点ほ場9地点の平均値(あきたこまち)

2 あきたこまちの栄養診断(幼穂形成期追肥の判断)

- ① あきたこまちで幼穂形成期(幼穂長 2 mm、葉数 11 葉前後)を迎えているほ場では、時機を逸せず生育・栄養診断を実施してください。
- ② 診断結果を基に、倒伏に注意しながら葉色の急激な低下を招かないよう適切な追肥を実施します。
- ③ 幼穂形成期の生育型がVI型に該当する場合は、緊急処置として倒伏軽減剤の使用を検討します。
- ④ 肥効調節型肥料を基肥などで使用した場合、追肥は施用済み窒素分量などを考慮し、慎重に判断します。



生育型	窒素追肥量(kg/10a)	
	幼穂形成期	減数分裂期
I型	2kg	2kg
II型	2kg	2kg
III型	ムラ直し1kg	2kg
IV型	なし	2kg
V-1型	なし	ムラ直し1kg
V-2型	なし	ムラ直し1kg
VI型	なし	なし

注) 目標収量 570kg/10a、あきたこまち

表 幼穂形成期(7月15日頃)における「あきたこまち」の理想生育量(中央地区:稲作指導指針)

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉緑素計値 (SPAD502)	生育指数 ($\times 10^3$)	栄養診断値 ($\times 10^5$)
理想値	61	515	10.7	42	31.4	13.2
上限値	63	559	10.9	44	34.2	14.7
下限値	58	471	10.5	40	28.6	11.8

表 減数分裂期(7月25日頃)における「あきたこまち」の理想生育量(中央地区:稲作指導指針)

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉緑素計値 (SPAD502)	生育指数 ($\times 10^3$)	栄養診断値 ($\times 10^5$)
理想値	70	491	11.9	38	34.6	13.1
上限値	72	527	12.2	39	37.0	14.2
下限値	69	456	11.7	36	32.2	11.9

注) 生育指数は草丈×茎数、栄養診断値は草丈×茎数×葉色(SPAD)で算出

3 今後の水管理

- ① 幼穂形成期から出穂までの水管理は、稲体の活力維持のため間断かん水が基本となります。中干しが十分に実施できなかったほ場では、落水期間が長めの間断かん水を実施し、田面の硬度を確保します。
- ② 減数分裂期は出穂の10~12日前頃ですが、この時期は低温に弱い時期なので、日平均気温20℃以下(最低気温17℃以下)の低温が予想される場合は、深水管理(水深15cm以上に保つ)を行い、幼穂を保護します。
- ③ 出穂の時期は水を多く必要とするため、出穂後10日間は湛水状態を保ちます。その後は間断かん水を基本としますが、気温が30℃以上になる場合は、かけ流しや水の入れ替えにより根の活力維持に努めます。また、フェーン現象等で乾燥した風が強い日は湛水状態を保ち、稲体の水分消費を軽減します。

4 病害虫防除対策

① 斑点米カメムシ(アカスジカスミカメ) (発生量:多い)

- ・ 稲の出穂15～10日前までに農道や畦畔、休耕田等の草刈りを地域で一斉に行う。
- ・ 水田畦畔刈り込み代用剤を散布すると40～50日の抑草効果が期待できる。
- ・ 水田内に雑草(ノビエやホタルイ類等)が多発すると、アカスジカスミカメの水田内への侵入が助長されるため、水田内の雑草防除を徹底する。適切な中・後期除草剤を選択し、雑草防除を徹底する。
- ・ 薬剤防除は出穂期10日後頃と同24日後頃の2回散布が基本となる。このため、散布計画の策定と薬剤の準備を早めに行う。

表 斑点米カメムシ類防除のための雑草処理体系

	6月		7月		8月			9月		
	下	上	上	中	上	中	下	上	中	下
本田防除					1回目防除 ←→ 出穂期10日後頃		2回目防除※ ←→ 出穂期24日後頃			
農道・畦畔	←→				←→ 草刈り			←→		
法面・休耕田	←→ 草刈りの徹底			→← 草刈り禁止					←→ 草刈りの徹底	

出穂15～10日前までに数回行う。水田内のイネ科、カヤツリグサ科雑草の穂はアカスジカスミカメの発生を助長するため除草対策を徹底する。

1回目の茎葉散布剤の散布7日後までに草刈りを実施し、アカスジカスミカメの増殖源となるイネ科雑草の除去に努める。

稲の収穫2週間前以降から草刈りを実施する。

※ 出穂したホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場やイネ科雑草が主体の牧草地・休耕田等に隣接するほ場、発生予察情報に基づき多発が予想される場合は出穂期10日後頃と同24日後頃の2回防除を必ず実施する。

② 葉いもち(発生量:やや多い)

- ・ 7月18日に、病害虫防除所から防除対策情報「葉いもちの病斑増加に嚴重注意」が発表されました。直ちにほ場の検診を実施して、葉いもちの発生状況を確認しましょう。
- ・ ほ場を巡回し、葉いもちが容易に確認できるほ場では、直ちに予防剤と治療剤の混合剤(ノンブラス剤、ブラシン剤)による葉いもち追加防除を実施し、上位葉の発病を抑制する。
- ・ さらに、穂いもち防除としてトライフロアブル、ラブサイド剤、ビーム剤のいずれかの薬剤により出穂直前と穂揃い期に防除を実施する。または、出穂15～7日前にコラトップ剤またはゴウケツ粒剤かサンブラス粒剤を使用するのも有効である。
- ・ 現在、葉いもちの発生が認められないほ場では、周辺ほ場も含め巡回を継続し早期発見に努める。

③ 紋枯病(発生量:多い)

- ・ 穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃い期に茎葉散布剤で防除する。その際、薬剤が株元に到達するように散布する。
- ・ 粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場で本病を対象とした育苗箱施用剤を使っていないほ場に限る。散布時期はモンガリット粒剤が出穂20～10日前、リンバー粒剤が出穂15～5日前である。粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しをしない。

④ 稲こうじ病(発生量:やや少ない)

- ・ 前年多発したほ場では出穂20～10日前に、ドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。
- ・ ドイツボルドーA、ボルドーは高濃度で散布すると薬害を生じやすい。Zボルドー粉剤DLは高温時には薬害を生じやすいので夕方の涼しい時に散布する。
- ・ 粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しをしない。

5 浸水・冠水したほ場の管理

今回の大雨により浸水・冠水したほ場では、水稻の生育に影響が出ることが懸念されるため、適切な事後対策を行ってください。

① 水管理について

- ・ 冠水した場合には、速やかに排水を図ります。
- ・ 浸水・冠水したほ場のイネは、水分を消耗しやすくなっています。排水後、急激に乾燥することがあるので、新しい水を入れて出穂期までは飽水状態を保つようにします。

② 病虫害対策

- ・ 浸水・冠水により病虫害に対する抵抗力が低下しやすいので、葉いもち等病虫害の発生状況をよく確認し、発病が確認されたら直ちに防除を行います。

③ 崩落畦畔の補修

- ・ イネにとってはこの後も水が必要な時期が続きます。畦畔が崩れている場合は、土嚢を積むなどの応急処置により湛水状態を保てるようにします。

④ 作業は安全第一で

- ・ 大雨の後は、少しの降雨でも土砂災害の危険度が高まりますので、ほ場の見回り等を行う際には気象情報等に十分注意し、危険な箇所には近づかないなど、二次被害の防止を心がけましょう。

⑤ 刈り取りはゆっくり

- ・ ほ場内に土砂やゴミなどが流入したほ場では、すべてを除去できずにはほ場内に残っている場合があります。刈り取り時はコンバインの作業速度を落としたり、高刈りするなど、異物の混入対策と作業安全に配慮します。

5 熱中症対策

過去10年間の全国における農作業中の熱中症による死亡事故は、その8割が7～8月に集中しています。7月13日に仙台管区气象台が発表した東北地方の1か月予報では、向こう1か月の平均気温は高い見込みと予報されており、特に注意が必要です。次の事項を参考に、熱中症対策を徹底してください。

① 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行いましょ

- ・ 特に70歳以上の方は、のどの渇きや気温の上昇を感じづらくなるので、高温時の作業は極力避けましょう。

② 作業前・作業中の水分補給、こまめな休憩をとりましょ

③ 熱中症予防グッズを活用しましょ

- ・ 屋外では帽子、吸汗速乾性素材の衣服、屋内では送風機やスポットクーラーなど。

④ 単独作業を避けましょ

- ・ 作業は2人以上で行うか、時間を決めて水分・塩分補給の声かけを行うなど、定期的に異常がないか確認し合うようにしましょ。

◇次号は7月26日頃の予定です。